

2023年12月24日 アドベントⅣ クリスマス礼拝

説教題「イエス・キリストの誕生☆平和」ルカ福音書2章8～14節

主任牧師 加藤 誠

「いと高きところには栄光、神にあれ。地には平和、御心に適う人にあれ」(ルカによる福音書2章14節)

神は飼葉桶に生まれ、十字架で人々から捨てられた方に命の言葉を託されました。神が主イエスに託し、私たちに「聞け」と言われた命の御言葉とは何でしょうか。わたしは、神が主イエスに託された命の御言葉は「神の恵みは共にある！」「神の祝福、慰め、希望があなたたちと共にある！」という宣言であったと受けています。

当時のユダヤ教では「神の恵みが共にある人」と「神の恵みが共にない人」とがはっきりと色分けされていました。旧約聖書の戒めをきちんと守って実践している人には「神の恵みが共にある」。しかし聖書を知らず、戒めを守れていない人は「神の恵みは共にない！」と。しかし、主イエスはその教えを根底からひっくり返されました。ユダヤ教で「神の恵みが共にない」とレッテルをはられている一人ひとりに「神の恵みはあなたと共にある！」という恵みと励ましの言葉を届けていかれたのです。

例えば「今泣いている人、お腹を空かせている人、貧しい人は幸いだ。神の国はその人たちのものだ」と宣言されました。「今泣いていて、お腹を空かせ、貧しい状態」が「幸い」なのではありません。そうではなく「今とても困難な中にあるけれど、神の恵みはあなたと共にある。わたしもあなたと共に生きる。だから大丈夫。神の愛に向かって一緒に歩んでいこう！」と語りかけられたのです。

今朝の箇所では天使ガブリエルはマリアへのお告げを届けました。「恵まれた方、おめでとう。主があなたと共におられる」と。それを聞いたマリアは戸惑います。なぜならユダヤ教ではマリアのような聖書も知らない何の实践もしていない小娘に「神の恵みが共にある」などと語られることはありえないからです。だからマリアは戸惑ったのです。「なぜこんな小さな者に神が恵みを注いでくださるのですか？」と。

「恵まれた方、おめでとう。主があなたと共におられる」。この天使のお告げは祝福と同時に励ましの言葉です。神の子イエスの母となることは大きな恵み／喜びであると同時に、大きな困難と悲しみの始まりを意味したからです。母マリアは主イエスが人々に喜ばれ大歓迎される姿を見るとともに、十字架に無残に捨てられる姿を見ることになるのです。母マリアの前途には、我が身を剣で刺し貫かれる痛みと悲しみが待っていました。天使はそのマリアに恵みと励ましを語ったのです。「大きな恵みと同時に困難と悲しみが伴うイエスの母の役割をあなたは担う。けれども大丈夫、神の恵みがあなたと共にある。神の恵みをもってあなたの役割を生きてほしい」と。

クリスマスは、神が主イエスに託された神の恵みと励ましの語りかけを大切に受ける日です。主イエスは特に今この世界でさまざまな厳しさ、生きづらさ、重荷を抱える一人ひとりに「神の恵みがあなたと共にある。大丈夫。わたしもあなたの重荷を一

緒に受けて歩むから！」という恵みと励ましを手渡すために来てくださいました。

今年のアドベントに『あふれでたのはやさしさだった』という本と出会いました。絵本作家の寮美千子さんが奈良少年刑務所の少年たちと絵本と詩を通して出会い、彼らがそれぞれに自分が背負ってきた苦しみや悲しみを言葉にし、それを一緒に受けてくれる仲間を見つける中で、一人ひとりが変えられていく物語が紹介されています。

寮美千子さんはこう語っています。「刑務所に入るような人は、がさつで凶暴な人だろう、何を考えているのかわからない人だろうと、漠然と考えていた。ところが奈良少年刑務所で出会った少年たちはまったく違っていた。想像を絶する貧困のなかで育ったり、親からはげしい虐待を受けたり、加害者になる前に被害者であったような子たちだった。それぞれが自分を守るために自分なりの「鎧」を身に着け、心を固く閉ざしていた。けれども自分のことをきちんと受け止めてくれる仲間がいることを知り、仲間を信頼して自分の苦しみや悲しみを言葉にできた時、一人ひとりが確実に変わっていった。彼らが鎧を脱ぎ捨て、心の扉を開けたとたん、あふれでてきたのはやさしさだった。重い罪を犯した人間でも、心の底に眠っていたのは、やさしさなんだ。ほんとうはだれもが、愛されたいし、愛したいのだ」と。人間、誰もが心の底で求めているのは愛。自分を受け止め、共に生きてくれる真実の愛を知った時、少年たちの人生は方向転換し、自分が背負うべき重荷を担う勇気と力を得ていったのです。

この本を読みながら、特に深く考えさせられたのは次の言葉です。「少年たちが、頑なに身に着けていた鎧を外し、心の扉を開き、自分の感情を表現できるようになると、はじめて、彼らの中に他者に対しての思いやりが生まれる。その時になって、ようやく、彼らは、自分の罪に気づくことになるのだ。」「私たちは一度も『反省しなさい』『自分を見つめなさい』と教室で言ったことがない。それなのに、彼は、自分からこの詩（『つぐない』）を書いてきてくれた。うれしかった。心を閉じている人に、いくら反省を迫っても意味がない。大切にされたことのない人に、人の命や人生の大切さを説いても伝わらない。彼らは、大切にされることで、はじめて他者の大切さを知り『とんでもないことをしてしまった』と感じるようになる。」

この世界にはさまざまな悲しみが溢れています。国と国もそうですが、人と人同士が傷つけ合い「平和」が成り立たない。その根本原因は、私たちが神から与えられた真実の愛を見失っているところにあるのではないのでしょうか。私たちが誰かを思いやり、大切に思い「平和」をつくり出していくためには、自分に向けられている神さまの真実の愛から始める必要があるのです。主イエスは私たちに、十字架に向かう生涯を通して神の真実の愛をあらわしてくださいました。私たちがその愛を大切に受け取り、お互いの間で分かち合い、自分が担うべき責任に忠実に歩み、そして平和をつくりだすことができるように。一人ひとりに「あなたと共にわたしがいる」という神さまの命の御言葉を手渡してくださいました。クリスマスは、その神さまの愛を大切に受けていく日です。クリスマス、おめでとうございます。